

子供の性的方面

文學士 多田鐵雄

フロイドの精神分析による、生れた許りの嬰兒が母親の乳をくはへるのは、唇で吸ふことの慾望とその快感がさせる處の性的本能の第一期の現はれだとし、又、子供の無邪氣な生活の中にも、自己保存の本能から起る種々の行爲、衝動と並んで、性的本能のそれが働いてゐるものだとする説は、現在では、略承認されてゐる處である。私自身としても、過去の體験を反省して見れば、子供の時に、幾度となく、無意識の、不完全な性的本能の周期的發動があつた後、青年となるに及んで、それが意識の上に現はれて來たのである。例へば、未だ私が幼稚園に行つてゐた頃、よく奇麗な先生

に背負つて貰ひたがつたものだつたし、又背負さつてゐることが氣持よかつたものであつた。又、ぢつと考へて見ると、それは小學校へ上つてからかとも思はれるが、相手と取組み合つて、それに馬乗りになつて抑へることがよく在つたが、その相手が女の子だつた時、その當時は弱い女の子供を打伏せてゐるのだと思つてゐたが、なんだか、そこに女の子供を打伏せてゐることが氣持を動搖させ、その癖、すぐ離れたくもなかつたやうな記憶がまぼろに浮ぶのである。

以上に類したことは少し仔細に觀察すれば、凡ゆる子供に於て認め得るものであるが、その程度

以上のことも往々にして見受けられる。例へば、二三の子供はすぐ先生のスカートや袴の裾を引張つたりして喜んでゐる。又或る子供は、朝の會集で、必ず好きな女の子の隣でなければ席を取らない、そして色々とその子にたわむれる。又一人いつも隣に来る女の子の頬べたへキスしてゐた子供もあつた。殊に恐ろしいことは、或る幼児教育者の講演で聞いた話であるが、或る幼稚園で時間中二人子供が居ないのでどうしたのかと探したら、園舎の蔭の見えない處で、大人の通りのことをまゝ、いごとで父と母になつて二人で寝てゐた事實があつたさうである。

然しこれらの事實は決して看過すべからざるものなると同時に、又何等憂ふるべきことでもないのである。即ち、一般に正常の子供に於ける性的本能のあらはれと見えるものすべては、成長後、成年後のそれとは全く異なり、元來、意識下

に於てなされ、従つて別に子供の精神に影響を及ぼすものでなく、又その力も到つて微弱なはづである。とは云へ結果から見ると、世の中の多くのドン、ファンや性的犯罪者は、大部分が性的早熟者であり、而も先天的なものは少數で、大概は周囲の事情、教育、環境がそうさせたやうであるし、又反對に遺傳その他で先天的にかかる傾向あつたものでも、その周囲の良教育、良環境がその不幸を救ひ得たことも少なくないやうである。而も多くは學齡に達したかそこそこに於て性に目醒め、その結果不幸に陥つて行く者がそれらの略過半數だと云ふ事實を知れば、子供のこととして棄てておけることがらでは決してないのである。

何がこの子供の無邪氣な性的本能を、意識的になし、變態的になし、大人のそのやうになし、要するに邪道へ導びくか？

第一に性に關することを大人の道德で律すこと

である。子供が無意識に行爲してゐることを強く叱つたり、又性に關する點を無理に秘密にするところがそれである。學者の研究によれば、子供が局部に手を觸れたにしても決して大人のやうな感覺は感じない、むしろ唇の方が敏感であるとのことである。とすれば、それを若し大人が強く叱つたとすれば、子供はそのことに疑問が涌き、却つて餘計に試るにちがひない。子供は常に知らないものを知らうとする、神祕なものを秘密なものを明るみへ出さうとする。子供は凡て好奇心から行動して行く。「問題の子供」の著者ニールはその書の中で述べてゐる。

「母親が叱つてそれを止めさせる時に、子供は始めて性的の事柄が、此の世に於て最も興味ある神祕的なものなる事を感じずるに至り、それが誘惑的に感じられるのである。」(第三章性教育の

一節)

こゝでニールのことに一寸觸れても決して脱線ではあるまい。フロイドの精神分析の流れを汲んでゐるだけあつて彼は凡ゆる教育の弊害を抑壓と禁示の點に置いてゐる。その云ふ所は、時に獨斷のきらひはあるが、鋭い觀察を以て、主眼として説いてゐる抑壓禁止の説は大いに聽くべきだと思はれる。彼は排泄物に就いても斯う云つてゐる。排泄物に對する抑壓も、性に對する抑壓と同様に恐るべきものである。事實兒童に於てはこの二つは一緒である。その正否は別として、子供達を自由に語らせてゐると、糞便のことを持出して來て面白がつてゐることはよく經驗することである。これなども、糞便は汚ないもの、他人の前ではしてならないもの、云つてならないものと云ふ大人の禁止が反動的に特殊の興味を子供に懷かせてゐると云へやう。ともかくも、私が冒頭に於て列擧したやうなことも、大人の眼から見れば危険のや

うではあるが、子供にあつては單なるいたづらの氣分で行動してゐるだけで、之を抑壓して却つて意識さすと云ふやうなことはくれぐれも慎しまねばならないと思はれる。

第二には、大人の生活、それも子供に無關心な大人の生活それである。殊に現今は時代の風潮からしても、明けつ放しの行動が流行してゐるが、大人だけでの世界でならいざ知らず、子供と云ふことを考慮に入れるときには、可成り留意せねばならぬことである。子供の生活は常に模倣の生活である。勿論私は自身調査することは出来なかつたが、先刻の引例の講演中の子供も、恐らく何等かの機會で大人のそれを目撃した結果だと推定される。先達て、私は或る七歳の子供の話聞いた。

「僕ね、先生、チャンバラが好きなんだよ、西洋もの嫌ひだ。僕つまなくてしやうがないんだ

よ。先生、チャンバラの方がいゝね。先生、キツスなんて憎らしいね。僕、小さい時は、キツスの時、黙つて見てたけど、憎らしいのさ、キツスのとこ、鐵砲で打つちやうの僕。あんなもの鐵砲で打つちやへばいゝんだね、先生。キツスの時、今ね、僕、前にほら椅子があるでせう。あの椅子のとこへかくれちやふの、だつて馬鹿らしいね、あんなもの。チャンバラは面白いけどね。」

これは母親が側に居たのであるが、恐らく母親は子供に問はれて、あんなことするものぢやないの、馬鹿らしいことなどと云つたのだらう。だが既に、映畫の大人の生活でも秘密に行はれてゐる行動を寫し出すと云ふ性質を辨へず子供を連れて行つたことは不注意である。又、その説明も當を得てゐない。無邪氣な子供は映畫の物語の筋と母親のキツスに對する侮蔑的な説明とを結びつけ

て、悪者のやうに考へてしまつてゐる。即ち歪んだ知識を得てしまつたのだ。概して日常子供の目に觸れる大人の生活は、子供に知識を授け、導いて行く點で、有益な方が多い。がほんの一寸しかよくないことが、又、それがいつもは眼に觸れないので珍らしい様に、餘計に子供の好奇心をそゝるのである。それだけに却つて、與へる影響は強いので、注意を要することと思はれる。

第三に、云はば第一の抑壓、禁止と一見反對に立つかに見えるが、放任も又危険の一つである。偶發的な行動も、その反覆の間に習慣となり、興味も深くなつて行き、意識的になることが往々にしてある。子供の興味の凡て、行動の凡ては、全く雜然たるもので、何ら相互に關聯のあるものではない。それ故、多くの場合は、容易に一つの興味を以て他の興味に代へることが出来るのである。要するに教育者としては、子供を律するに大人

のそれを以てせず——他の事柄に就いては子供の生活は別だとしてゐても、性に關する方面になるとうろたへて大人の考へで律したがるものであるが——、又常に深い觀察を以て、子供のかかる方面の狀況を知り、その程度に従つて、一向きに抑壓、禁止によつて無理に意識上に引出す結果になることを避ける一方、何らかに對する子供のより強き興味を發見して之に子供の心を移さしめる等常に關心を怠らなければ、その子供の將來の不幸を未然に防ぐことが出来るものだと思はれる。

